

焼玉エンジン

焼玉エンジンは単純な内燃機関であり、1886年に英国で初めて開発されました。ホーンスピー・アクロイド石油エンジンという初期の型式のものが、数年後に日本に持ち込まれ、国内の製造者がそれを改造しました。焼玉エンジンは使い方が単純で、製造しやすく、安価な燃料で動きました。釧路の漁師たちは、1913年に沖合で死亡事故が起こった後に、このエンジンを本格的に採用しました。この事故では、数隻のマグロ漁船が沖合でひどい嵐に巻き込まれました。これらの船は港に戻ることができず、63人の漁師が亡くなりました。焼玉エンジンは、漁場への往復時間を短縮し、出漁区域を広げました。

焼玉エンジンを備えた船は、エンジンのリズムカルな音から、「ポンポン船」と呼ばれました。1950年代に、焼玉エンジンは、より強力なディーゼルエンジンへと徐々に置き換えられていきました。この博物館に展示されている焼玉エンジンは、1952年に作られたものです。